若　　者

私の英国留学日記

吉　田　隆　次*

昭和49年6月末，私は株式会社大林組の留学生として2年間英国で勉強するために羽田空港を飛び立ちました．ロンドン郊外のヒースロウ空港から2階建のバスに乗り，ロンドン市内で英国国鉄に乗りつぎ郊外へと向いました．すすけたような工業地帯を通りぬけ，なだらかな丘陵地帯へと入ってゆくとやがてブレントウッドという小さな住宅町につきます．私の英国生活はこの郊外の町から始まったのです．

両手に重いスーツケースをぶら下げて駅に降り立つと森嶋教授夫人が迎えにきてくれていました．森嶋教授はロンドン大学（ＬＳＥ）の経済学の教授で，私の知る限り英国で唯一の日本人の英国の正式な大学教授です．去年，昭和51年末に文化勲章を受賞されましたが，当時はそれ程偉い先生とはつゆ知らず失礼の数々，今から思うとひや汗の出る思いです．

やがて先生の御一家は夏の講演旅行のためにカナダへ出発，9月までの2ヵ月の間私と妻の2人は3階建8ＤＫの広い邸宅を預ることになりました．一般に英国の住宅は1部屋が広く，たとえ労働者でも日本人の目から見るとずいぶん立派な家に住んでいるのです．そんな中で大学教授ともなれば，かなりの家に住んでいるのが普通です．従って森嶋教授がレンガ造りの3階建のいわゆるデタッチドハウスに住み，敷地が約500坪あるといっても少しも不思議ではありません．庭は一面に芝生が敷かれ，そこにはアジサイ，バラ等の他，名も知らない花が咲きみだれ，その向うには小さな園芸場があり，リンゴの木が12本植っていて秋にはリンゴ狩が楽しめるのです．こんな広い邸宅を私達が管理できるはずもなく，実は週に一度メイドさんと庭師がやってきてきれいに掃除と芝刈をしていってくれるのです．

狭い日本の住宅から突然こんなに広い邸宅に住むことになって私がもてあましたのも当然と思って下さい．このすばらしい緑につつまれた住宅地とロンドンの真中ピカデリーサーカスにある英語学校とを往復する生活の中で，なんとなく庭で日光浴をしたり，英語学校のバスツアーでオックスフォード大学へ見学に行つたり，ピカデリーサーカスからロンドン第一の繁華街のリージエントストリートやオックスフォードストリートを散策したりする毎日があっという間に過ぎ去り，やがて9月も末になるとロンドン大学の新学期が始まります．

私の学ぶロンドン大学・ユニバーシティカレッジは，ロンドン大学の全部で40近くあるカレッジの中でも最も古く，ロンドン大学本部ビルのすぐ近くにあります．そもそもロンドン大学は，オックスフォード大学，ケンブリッジ大学，エジンバラ大学に次いで古い大学ですが，スコットランドにあるエジンバラ大学を除いて一般に第3の大学と考えられています．その昔，大学教育には博物館と図書館が不可欠であるという発想からオックスフォードおよびケンブリッジ両大学には立派な博物館と図書館があります．英国で発行される印刷物はすべてこれら両大学の図書館と大英博物館図書館とに納められることになっています．従って英国一の規模を誇る大英博物館をもつロンドン大学は，実は英国一の大学であるのかもしれません．

さて，私の学ぶ建築経済学および経営学の修士コースはかなりユニークな学科ですので，その生徒もずいぶん多彩でした．全部で十数人の少人数でしたがほとんどが一度社会に出たことのある人々で，他の大学の講師をしている人々や，大ロンドン市役所に勤める建築家，建設会社の社員等の他，ベネズエラの建築家，ホンコ

* 吉田隆次（Ryuji YOSHIDA），株式会社大林組東京本社，建築管理部建築管理課，昭和40年構築科（建築コース）卒業，昭和51年ロンドン大学MSc 修得，建築学

ン大学の講師等の外国人達です．

第1日目は教授室のソファーに座っての自己紹介からそのまま講義に入りました．この様な状態ですから実に和気あいあいの雰囲気ですが，こまったことには，先生の講義はともかく生徒がてんでに質問を始めると私の英語力は限界に達し，ただ彼等が口を動かして雀の様にさえずっているとしか思えなくなってくるのです．これは大変なショックで，渡英前の日本での勉強，渡英後の3カ月間の英語学校の訓練で自分なりに自信をつけていたつもりでしたが，先ゆき心配になってきました．

私が青い顔をしてもどってきたのを森嶋先生が目ざとく見つけ，夏目漱石の話をして下さいました．夏目漱石はその昔文部省の国費留学生としてロンドン大学に学んだのですが，毎月義務づけられている文部省への報告を出さなくなったため，日本では漱石は気が狂ったという風評が立ったそうですで．実際，漱石は語学，文化の違いなどで混乱し，下宿へ引きこもってしまったのです．見かねた下宿のおばさんが漱石に運動することを勧め，そのためには自転車に乗るのがよいと言われ，しばらく自転車に乗って運動したそうです．そんなわけで彼はロンドン大学へは通わず，そのかわり週に一度ロンドン大学の先生に個人教授をたのみ，シエクスピアを独りで勉強しました．この様に夏目漱石の昔から英国に学んだ若者は言語と文化の違いから多少の混乱に陥るのが常であること，そして彼らがそれを乗りこえて学んできたのだということを教えられ，ずいぶんと気が丈夫になりました．

英国の大学の授業は，講義の他に多くの書物を読むことを義務づけられ，先生の言うとおりに読むとほとんど毎日1冊の本を読まなければなりません．試験は年に一度しかありませんが，レポートを度々提出しなければならず，全く気がぬけません．

その年も終りに近ずいた12月のある日，私はテューターのアンドリュース先生からクリスマスパーティに招待されました．アンドリュース先生の家はロンドン塔の近く，テームズ河畔にあるいわゆるタウンハウスと呼ばれる住宅で1つの大きな建物を縦割りに1戸ずつに分けたものです．ほとんどの住宅のように半地下が付き地上3階建てですから，各階に2部屋ずつで台所を含めて合計8部屋の大きなものです．その中の1階の広い居間で私はメキシコ人，中国人，英国人などの招待客に紹介され，シェリーから始まるイギリス風のディナーで楽しい時を過ごしました．その時にアンドリュース先生が私に近づいて話して下さり，私のように欧米文化圏以外の国からきた人々は，文化・習慣の違いからいわゆるカルチュアショックを受けること，しかしクリスマスを過ぎる頃になると語学にも，文化の違いにも慣れて学生々活をエンジョイすることができるという話をして下さいました．私はこの気どらない青い目の先生が，何もかも知っていて暖かく私を見まもっていてくれたのを知り，本当に感謝したものです．

こうして新しい年が明け，第2学期が始りました．生徒達もこの時期になると皆々真剣に勉強に取り組みます．気候的にも冬の英国は一日中雲が低くたれこめ昼なお暗く，しかも春雨のような雨が降るのです．朝は暗いうちから起きだし，9時を過ぎるとようやく明るくなり，4時にはもう黄昏の闇がたちこめるといった毎日です．室内にこもって勉強でもしないことにはやりきれません．英国に数々の偉大な学者が育ったのもこういう気候のせいもあるのかと思う程でした．

このような中で年中行事となっている列車のストライキでもあると私のような気の短い外国人はイライラが最高点に達します．しかし英国人は実に落ついたもので，ある時など発車前の通勤列車にようやく座った時場内アナウンスがあり，信号を受けもつ労働組合が突然職場を放棄したため列車はすべて1時間程ストップするという案内がありました．その時満員の列車内はわずかにざわめいただけで，ほとんどの人はそのまま新聞や雑誌を読み始め，コーヒーでものもうと席を立ったのは私ぐらいでした．1時間後にもどってみると広い駅構内は人の海，しかもすべてが整然と列を作って順番を待っているのでした．

本当にこの国はストライキで国をつぶしかね

ない感がするのに一般の英国人は割合平気な感じです．日本で英国病と呼ぶほどにはこの国の人々は深刻に考えていないようにも見受けられます．

彼等はまた経済がすべてではないと考えているのかもしれません．事実国際外交の舞台では英国はまだ影響力があり，この国の外交だけを見ているとずいぶんと大国だと感じます．また一方では，静かに深く英国古来の階級社会が崩壊しつつあるのかもしれません．歴史をひもとくと，この国ほど隠やかに数々の改革を進めてきた国はありません．急激な変化をきらう国民性の結果が現在の立憲君主制を生みだし，民主々義の手本をつくりあげたのですが，反面には古い社会体質がずっと生き残ってきたのです．英国には未だに700人を超える世襲貴族がいるそうですが，彼等に代表される階級社会が厳として存在するのも事実です．この古い体質の社会がアメリカ的大衆社会に影響されて徐々に改革されつつあるのかもしれません．

事実多くの教育ある英国人を見ているとこういったストライキなどに目くじらを立てずにじっとがまんをして見守っている感がします．彼らは大衆である労働者が意識に目ざめ，主導権をとり，近代社会では弊害となっている古い階級社会を破壊しその体質を変えようとしているのをじっと待っているような気がしてなりませんでした．それ由，たとえストライキにより国が経済的に貧困になろうとも，社会の変革を優先させているのかもしれません．幸いにも日本は敗戦のゆえに古い階級社会が崩壊したのですが，英国は勝ったが由に階級社会が残ってそれが今日の発展を阻害しているのは全く歴史の皮肉ではないでしょうか．

暗い長い冬も3月末のイースターに入ると昼間の時間が目に見えて長くなり木々につぼみが目立ち始めます．学校は3週間のイースター休暇になりますが，学生は来る6月の卒業試験へと向って勉強し図書館はどこも満員になります．レポートの提出が遅れた学生は，この休暇が最後のチャンスです．そして4月末の第3学期が始り，6月の試験へと一直線に時は過ぎてゆきます．

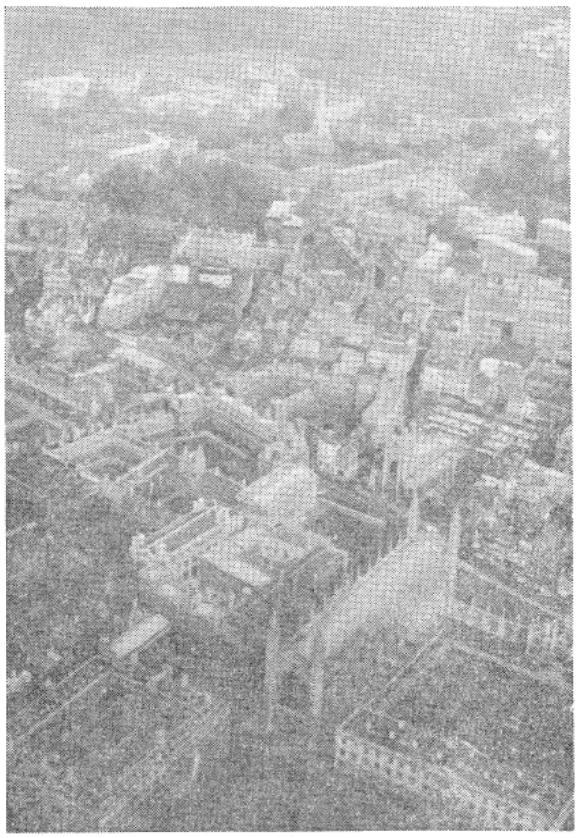
試験は論文形式ですので語学にハンディのある外国人には不利です．この国はかなりの文科系偏重で自分の意見なり考え方をいかに表現するかに教育の重点がおかれているようです．小学生の時から鉛筆ではなくペンを持たされ，間違って書いても横線を引いて消し，間違いも答の内というくらい書くことに慣らされてきているのです．従って自分の意見を発表するのがうまくなるのは当然でしょう．この辺に英国人の話術と外交力の秘密があるようです．

試験が終ると一般の学生は解放され明るい日差しの屋外へ思い思いに散ってゆきます．ウインブルドンテニス大会，ロイヤルアスコット競馬等の種々の行事が始るのもこの頃からです．人々の服装も薄着になり，女性は未だすたれないミニスカートに背中まるだしの軽装でロンドンを闊歩します．

私は修士論文のテーマをＣＡＤ（電子計算機援用建築設計）に限定したところ，そのためにはケンブリッジ大学が良いと言われ，この夏の間にケンブリッジへ移転することになりました．1年余の間にびっくりする程増えた家財道具を車に満載して，9月の始めブレントウッドを出発し，ケンブリッジ街道へと向いました．

町並を離れると車は一面の緑の田園地帯へと入ってゆきます．ちょうど日本の田舎に水田が広がっているように，英国には牧草地が広がっていて，どこまで行っても点々と羊の群が放牧されています．通りぬける町々には，チューダー風のブラックアンドホワイトの家，ビクトリア風の赤煉瓦の家，またサッチドハウスと呼ばれる茅葺きの家など様々な英国の住宅を楽しめます．道路はどこまで行ってもなめらかで，ゆるやかな丘陵に沿って上下左右に変化します．大ブリテン島は日本列島と異なり，ほとんど山らしい山がないため，道路や鉄道はまさしく網の目のように四方八方へ広がっています．高速道路を走り，ラウンドアバウトと呼ばれる円形の交差点をいくつか通り過ぎると，樹木の向うに石造りの重厚な建物が見えてきて車はケンブリッジ市街へと入ります．

私の住む学生アパートは町の中程にあり，そこから私の入学したクレアホールというカレッ



ケンブリッジ大学全景

ジへ通う毎日が始りました．

同じ英国の大学といってもロンドン大学とケンブリッジ大学ではずいぶんと異なります．ケンブリッジ大学は建物自体歴史的価値があり，オックスフォード大学と並ぶ世界でも最古の大学です．衆知のごとく，この大学はユニバーシティと呼ぶ研究および講義のための建物群と，カレッジと呼ぶ学生および教官のための寄宿舎群とからなっています．現在ケンブリッジには29のカレッジがあり，それぞれが財政的にもほとんど独立した存在です．従ってカレッジフィーも異なり，施設・図書室の内容もそれぞれ違います．なかには，広い庭園と広大な附属運動施設を持つカレッジもあるかと思うと，赤字で悩んでいるカレッジもあるといったぐあいです．従ってどのカレッジに入学するかが重要なカギになるのですが，実際英国人にとっても，これを自由に選択する余地があまりないのは大変奇妙です．例えば，自分の学んだ高等学校の校長先生が何々カレッジの出身であるのでその紹介で，というようなことで決まるようです．

1つのカレッジの学生達の専門も千差万別で，あるカレッジに建築学専攻の学生が集中しているということはありません．先生方の専門も千差万別，それ由にカレッジ内で有名なチュートリアルと呼ばれる個人教授ができるわけです．今でも学生達はホテルのように立派な個室に入り，ゆうゆうと勉強しているのは，まさに別世界の感が致します．

私の学んだクレアホールは，大学院生のためのカレッジですから，少し趣きが異なりましたが，それでもケンブリッジの学生々活の一端を知ることができました．クレアホールには，英国人はもとより，アメリカ人・ドイツ人他世界の各国からきた学生約70名と，同じく世界各国からきた客員教授約30名，そして専属の先生約40名の合計140名からなっていました．カレッジとしては小規模なのでまとまりがよく家族的な雰囲気でした．

それではケンブリッジの有名なカレッジをいくつか紹介致しましょう．まず，キングスカレッジです．正門の屋根には尖塔が立ち並び，アーチの上にはカレッジを示す紋章が彫りこまれています．正門は守衛の宿舎となっていて，その両翼には透かし窓と尖塔が並び，入口に立つだけで今にも中世の騎士が馬に乗って現われそうな気がします．一歩中へ入ると広い芝生の中庭があり，右手がチャペル，左手が宿舎，正面が事務棟です．因みに，中庭の芝生は一般には立入禁止ですが，学位を修得した人がガウンを着ている時だけ自由に横断することができるのです．右手のキングスチャペルは数あるケンブリッジのチャペルの中でも最大で，建築的にも最も優れたものです．毎年クリスマスの日，このチャペルのコーラスは電波に乗って全英に放映されるのです．

左端の入口からチャペルに入ると，ゴシック風の高い天井の下に広い大きなステンドグラスの窓があり，左右にひな壇のように彫刻のある椅子が並んでいます．入口左手のコーナーには観光客用のおみやげ店があるのはご愛嬌でしょうか．このキングスチャペルはケンブリッジの象徴で，毎年ロッククライミングよろしく側壁をよじ登る学生が絶えないそうです．何年か前には屋根の上に小型乗用車がのせてあり，今だ

にどうしてのせたのか謎になっているそうです．

中庭を通りぬけると広い裏庭に出ます．正面にケム川がゆるやかに流れ，左右には主たるカレッジが見通せて，「バックス」と呼ばれる景観が楽しめます．ケム川に沿って右手に進むと重厚なクレアカレッジ，その隣りがトリニテイカレッジです．僧院風のピロテイを通り，小さな古びた扉を開けて，すり減った石の階段を上ると，数年前にチャールズ王子が学んだ部屋に行きあたります．川の右手にはベニスの橋を模した「なげきの橋」がかかっていて，川をはさんで広がるセントジョンズカレッジの建物群をつないでいます．

ケンブリッジの町の中心街にクリスマスツリーが飾られるようになると学生達は家へ帰り，町は人影が少なくなります．クレアホールにもクリスマスが訪ずれて残った学生はパーティを開きます．私を含めて3人の日本人は，日本祭を企画し，12月も終りの日曜の夜，日本酒とおかきをサービスして学生や先生方をホールに招待しました．ケンブリッジでは日本に関する研究も盛んで，日本映画もしばしば放映され，町には浮世絵のコピーを売っているくらいですが，それでも我々が日本大使館から借りてきた日本紹介の映画には大変に喜んでくれました．

4月に入ると町は青春を謳歌する若者で華やかになります．ケム川にはパントと称する小舟が浮かび，芝生には日光浴をする人々が見られるようになります．ケンブリッジは最も美しい季節を迎えますが，私の2年にわたる留学生活にはとうとう幕が下りようとしています．思えばこの2年の間に2つの大学に学び貴重な体験をしたように思います．

イギリスという国は日本と同じ島国でありながら地理的にヨーロッパ大陸に近いせいかずいぶんと人種の混合した国です．ロンドンの人口の半数近くは外国人であるといわれています．外国人が重要な地位につくことも多く，例えばロンドン大学のあるカレッジの学長はドイツ人であるといったぐあいです．欧米諸国はこのように人種が相互に交錯し，網の目のようにつながって根を下しているのです．従って彼らの国際感覚は歴史の試練を受けた歴戦の勇なのです．これに対して単一民族を誇る我が国はグループの力で彼らに対抗し，今日の地位を獲得しています．しかし世界が平和であれば我が国と彼らとの交流は深く根強いものとなり，つきつめれば個人と個人の交流になるでしょう．このような平和時の国際交流の場として，他の欧米諸国と同じように，日本もやはり大学と大学人の役割がますます重要になってくるのではないでしょうか．

初夏の明るい青空の下，この2年間にお世話になった人々の顔を思い浮べ，またこのような留学の機会を与えて下さった方々に感謝しつつ，街の角々に深い思い出を残して私は英国を離れました．